

映画『ショーシャンクの空に』の主人公にみるレジリエンス：  
漫画『鬼滅の刃』の主人公との対比を通じて

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2022-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 悟 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4794">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4794</a>

# 映画『ショーシャンクの空に』の主人公にみるレジリエンス —漫画『鬼滅の刃』の主人公との対比を通じて—

学芸学部 国際英語学科 高橋 悟

**要旨：**本稿では「レジリエンス（再起力）」という概念に着目し、それを構成する「感情調整力」「衝動制御力」「原因分析力」「楽観力」「自己効力感」「共感力」「働きかける力」の7つの要素に沿って、映画『ショーシャンクの空に』の主人公の言動を分析する。その分析の奥行きをより広げ深めるため、意外にも少なからぬ共通点のある漫画『鬼滅の刃』の主人公の境遇や資質と対比しながら考察を進めた。その結果、両主人公とも、レジリエンスの構成要素をすべて保有し、伸ばし、いかに発揮していることが確認された。振り返ってみれば、私たちの普段の生活も行き詰まりの連続であり、それを「逆境」と捉えるならば、私たちも彼らと同じく、生来持っているレジリエンスをさらに発揮し、人生というドラマの主人公として自己実現を成し遂げるとともに、多様な価値を社会に対して創造し提供できるのではないかと考えられる。両作品が我々に送り届けようとしているのはそのようなメッセージであると思料される。

**キーワード：**ショーシャンクの空に、鬼滅の刃、レジリエンス

## 1. はじめに

1994年に公開された米国映画『ショーシャンクの空に（原題：The Shawshank Redemption）』は、当初はさほどヒットしなかったものの、レンタルビデオの普及に支えられ、徐々に人気を博していった。ファン層の拡大は21世紀に入ってから続き、オンライン視聴が可能となった今日において、本作品は不朽の名作の一つに位置づけられると言っても決して過言ではないであろう。2021年10月末現在、IMDb社の映画評価ランキング（Top Rated Movies）において本作品は堂々の首位の座を堅持している。

本作品に関してはこれまでに幾つかの批評や論考がなされてきた。まず、本作品に描かれた大きなテーマとしては、①希望（渡辺，1995；鷺巣，1995；Sánchez-Escalonilla，2005；Parse，2007；西内，2009；Grady & Magistrale，2016；Dawidziak，2019；Nathan 2019）、②友情（Darabont，1996；Magistrale，2003；黒川，2005；金澤，2017）、③宗教性（キリスト教的要素）（Kermode，2003；姜，2007；Reinhartz，2013；Dawidziak，2019；服部，2019；澤野，2020）などが挙げられることが多い。

その他、主人公の「段取り力」（齋藤，2003）、「キャリア・チェンジ」（高橋，2021）、登場人物間の「同性愛」（國友，2015）を本作品のテーマとして着目し分析した研究もある。

次に、本作品の主人公アンディ・デュフレーンの人間性に焦点を当てた研究としては、Katz（1974）が唱えた3つの基本スキル（技術的スキル、対人的スキル、概念的スキル）の視点から分析したもの（高橋，2019）、フランク（霜山訳，1957）が唱えた3つの価値（創造価値、体験価値、態度価値）の視点から分析したもの（高橋，2020）などがある。これらの研究は主人公アンディの人間的魅力の一端を解明したものであるが、無尽蔵とも思われる彼の魅力に関しては、引き続き研究を進める余地は大きいと考えられる。

そこで本稿では、先行研究で用いられてこなかった「レジリエンス」という心理学の概念を導入し、その新たな視点からアンディという人物の実像に迫ることとする。言い換えれば、次節で説明する「レジリエンス」という力を彼がどのように保有・発揮していたかを分析し解明することが本稿の目的である。この目的達成のため、後述するレジリエンスの各構成要素に沿って彼の言動をつぶさに分析する。

加えて、その分析の奥行きをより広げ深めるため、漫画『鬼滅の刃』の主人公・竈門炭治郎の資質や姿勢と対比しながら考察を進める。一方は映画、他方は漫画と表現媒体は異なるものの、あえて後者と対比する理由は、両作品の主人公には意外な共通点が多からず見受けられるからである。その内容については第5節

で述べることとする。

## 2. 用語の定義

「レジリエンス (resilience)」は、物理学用語としては「弾力性」(北村, 2014)、「強靱性」(鎌谷ら, 2019)などと和訳され、心理学用語としては「回復力」(野口, 2019)、「再起力」(ハーバード・ビジネス・レビュー編集部, 2019; 井島, 2021)などと和訳されている。

この映画の主人公アンディは物理的・肉体的な強靱さを持ち合わせていないことから、本稿では心理学的な意味でこの用語を使うこととする。なお、レジリエンスの具体的な定義や説明には次のようなものがある。

- 困難または脅威に晒された状況にあって、それらにうまく対処するプロセス、能力、またはその結果 (Masten, et al., 1990)。
- 人の心と魂に深く刻み込まれた反射性で、世界を直視理解する行動様式。レジリエンスのある人や組織は確固として現実と向き合い、絶望して悲嘆することなく、むしろ困難に意味を見出し、何もない状態から解決策を考え出す (Coutu, 2002)。
- 人生の逆境に打ちのめされた人がそれまで以上に強くなって再起する精神的資質。レジリエンスが高い人は、困難、トラウマ、失敗に負けることも気力を喪失することもなく、方向転換し、感情的に治癒し、自身の目標に向かって努力を続ける方法を見出す (Psychology Today)。

ちなみに Reivich & Shatté (2002) は、レジリエンスを構成する要素または能力として、「感情調整力 (Emotion Regulation)」「衝動制御力 (Impulse Control)」「原因分析力 (Causal Analysis)」「楽観力 (Optimism)」「自己効力感 (Self-efficacy)」「共感力 (Empathy)」「働きかける力 (Reaching Out)」の7つを挙げている。

以上をすべて踏まえたうえで、本稿ではレジリエンスを「時に理不尽とも思える逆境にも屈することなく、自他ともに利する成果を生み出しながら再起する能力」と定義して用いることとする。

## 3. 研究の方法

本稿では、文学テキストの解釈技法 (戸松, 2012) を映画テキストに応用し、作品を繰り返し鑑賞し、媒体上に表現された言葉や事柄の意味や関連性を読み解き統合するという解釈学のアプローチを研究方法として採用する。

解釈学とは、「テキスト解釈の方法と理論を扱う学問」であり、「その場合のテキストとは、文字で表現された文書や文学作品だけでなく、現代では神話や夢、芸術作品など、解釈を要するあらゆる形式の言語作品までも含まれる」(久米, 2005)。よってこのアプローチはテキストを含む脚本に基づいて制作された映画、及び言葉と絵から成る漫画に関しても十分に適用可能であると考えられる。

これらを踏まえ、本稿では前節で紹介した Reivich & Shatté (2002) のレジリエンスの各構成要素に沿って、対象・対比作品の様々な場面を振り返りながら考察を進めることとする。

## 4. 作品の基本情報とあらすじ

### (1) 『ショーシャンクの空に』

先に述べたとおり、本作品は1994年に公開された米国映画である。スティーヴン・キングの原作小説をベースにフランク・ドラボンが脚本・監督を担当した。

この作品の舞台は米国東部で、時代設定は1940年代後半から1960年後半までである。主人公のアンディ・デュフレーンは30代の若さで大銀行の副頭取に就いていたが、ある夜、妻とその愛人を銃殺したとの罪で終身刑を宣告され、ショーシャンク刑務所に収監される。

しかしこれは全くの冤罪であり、かつ同刑務所は暴力や汚職の巣窟であった。彼は理不尽な仕打ちを経験しつつ、その過程において多くの創造的・利他的な行為を積み重ね、刑務官及び他の囚人たちから信頼を勝ち獲る。そして投獄から19年後、独房の壁から密かに掘り続けたトンネルを通じて見事外界へ抜け出す。彼は収監中に所長の汚職を隠すため、書類上にのみ作っていた架空の人物に現実社会で成り代わる。彼は何食わぬ顔でその人物名義の預金を下ろし、メキシコへと移り住むのである。その後刑務所内で友情を築いた親友のレッドが、仮釈放され、メキシコの浜辺を訪れ、アンディと喜びの再会を果たすところで幕を閉じる。

### (2) 『鬼滅の刃』

漫画『鬼滅の刃』は吾峠呼世晴によって構想・作画され、2016年2月から2020年5月まで雑誌『週刊少年ジャンプ』に連載された作品である。全205話から構成され、単行本としては全23巻が刊行されている。

最終巻はオリコン株式会社が発表した2021年上半期のコミックランキングで期間内売上498.3万部を記録し、第一位を獲得した。期間内売上が400万部を超えたのは同ランキング史上初の快挙であった。また株式会

社 TORICO が運営するウェブサイト「漫画全巻ドットコム」内の「歴代発行部数ランキング」(2021年10月末現在)においても、最終巻発刊後あまり時間を経っていないにもかかわらず、第7位にまで昇りつめている。

本作品の舞台は日本で、時代設定は大正時代である。主人公は竈門炭治郎という少年である。山中に住む彼はある冬の日、町まで炭を売りに行くのだが、翌日家に戻った時に母親と弟妹たちが人喰い鬼に惨殺されていた。しかし妹の一人の禰豆子だけは鬼に姿を変えさせられながらも生きていた。残された炭治郎は禰豆子を人間に戻すため、また鬼を退治するため、「鬼殺隊」という

政府非公認組織に入り、剣士としての修行を重ねていく。その過程において同期生や先輩剣士、刀鍛冶、後方支援部隊の仲間なども心を通わせていく。その中には度重なる鬼との戦いで命を落とす者もいたが、彼らの団結と奮闘により、最終的に鬼は跡形もなく滅び、禰豆子も人間に戻る。そして再び平和な日々を取り戻す。今の日本に鬼がいないのは彼らのおかげである。

## 5. 両作品及び主人公の特徴

表1は両作品と主人公の特徴を整理したものである。

表1 両作品と主人公の特徴

	ショーシャンクの空に (映画)	鬼滅の刃 (漫画)
作品		
舞台	米国	日本
時代	1940年代後半から1960年代後半まで	大正時代
物語の発端	冤罪(第三者による妻と間男の銃殺)	鬼による家族の惨殺
超常現象の有無	なし	あり(人喰い鬼の存在)
主人公		
年齢	30代から50代へ	少年
婚姻関係	既婚(死別)	未婚
家族	妻のみ	母、弟妹(長男である主人公を含む六人)
専門性・特技	税務・会計経理・殖財に精通	鋭敏な嗅覚を持つ
教養・世間知	豊富	少ない
肉体	ひ弱	鍛錬により俊敏化・強靱化
趣味	石磨き、チェス、音楽鑑賞	なし(描かれていない)
師の存在	なし	あり(鱗滝左近次、産屋敷耀哉)
仲間の存在	あり	あり
自身の鼓舞	なし(描かれていない)	あり(多数)
許さない相手(悪)	刑務所長、刑務主任、ボグズ(他の囚人)	鬼(特に鬼舞辻無惨)
取り戻すもの	自由の身、親友(レッド)	人間の妹、平和な世の中

上表に示したとおり、両作品には幾つかの相違点があるが、次のような共通点があることもまた確かである。

- ・ 身に降りかかった突然の不運と悲劇
- ・ 落胆と絶望
- ・ 己の無力さの痛感
- ・ 恐怖や死と背中合わせの日常
- ・ 執念と目的意識の堅持
- ・ レジリエンス(再起力)
- ・ 集団内における自己アイデンティティの確立
- ・ 他者との触れ合いと他者への貢献
- ・ 悪の存在と正義感に基づく懲悪

本稿では、このうちのレジリエンス(再起力)を中心に据え、その構成要素の中身を次節で逐一確認していく。

## 6. 考察

本節では、先に述べた Reivich & Shatté (2002) によるレジリエンスの7つの構成要素(能力)を「感情調整力」「衝動制御力」「原因分析力」「楽観力」「自己効力感」「共感力」「働きかける力」の順に沿って、両作品内に描かれた様々な場面を振り返りながら考察を進めることとする。

### (1) 感情調整力 (Emotion Regulation)

感情調整力とは、プレッシャーの下でも冷静さを保つ能力のことである(Reivich & Shatté, 2002)。それは、自分の感情が暴走・暴発しないよう、また取り返しがつかない過ちを犯さないよう上手に感情を調整する能力であると理解される。



### ①『ショーシャンクの空に』

冒頭の法廷のシーンで、殺人容疑をかけられたアンディは地方検事からの執拗な尋問に対し静かに受け答えをする。結果的に彼は判事や陪審員の心証を覆すことはできず、非情にも終身刑を言い渡される。しかしこの時、彼は大きな声を出すことも取り乱すこともなかった（少なくともそのような映像はない）。

彼がショーシャンク刑務所に収監された日の夜、古参の囚人レッドの声で「最初の夜が一番つらい」「新入りは正気を失いかけて誰かが泣き始める いつも必ず」というナレーションが入る。案の定、一人の新入りが大声で泣き出し、それを聞きつけた刑務官らによって独房の外に引っ張り出され、激しく殴打される（翌朝この主人は死亡する）。この一部始終はアンディにも聞こえていたはずであったが、彼は物音一つ立てることはなかった。

上掲の事例はアンディが優れた感情調整力の持ち主であることを示しているといえよう。冤罪で人生を一変させられた彼は絶望し、悲嘆に暮れていたにもかかわらず、自分以外の者にそのような姿を見せることは一切なかったのである。

本作品全体を通じてアンディは思慮深く、どちらかというとなんと寡黙な人物として描かれているが、その彼が感情を高ぶらせ、激昂する場面がある。それは、妻と間男を銃殺した真犯人の目星が付き、刑務所長に再審請求を懇願したものの一笑に付された時のことである。彼は所長のあまりの愚鈍さに腹を立てて暴言を吐き、これに激怒した所長は彼を懲罰房に入れるよう看守に命じる。所長室から連れ出される際に彼は「俺の人生なんだぞ！」（筆者訳）と何度も叫ぶ。

一面では彼のこの言動を感情調整力の欠如とみなすこともできるかもしれない。しかしこの時に彼が見せた憤怒の表出は所長を怯えさせ、ほどなくして所長を殺人命令者へと駆り立たせ、結果的に自らの悪行に対し自ら手を下さざるを得ない状況へと追い込むことになる。よってアンディのこの憤怒はむしろ正常に作用した感情の発露であり、「義憤」ともいうべきものであったと捉えられよう。

### ②『鬼滅の刃』

物語の開始直後に突然家族を失い、妹の一人（禰豆子）を鬼にさせられた炭治郎は、悲しみに打ちひしがれていた。しかしそこに現れた鬼殺隊の精鋭隊士・富岡義勇は彼に対し次の言葉をかける。「つらいだろう 叫び出したいだろう わかるよ（中略）しかし時を巻いて戻す術はない」「怒れ 許せないという強く純粋な怒りは 手

足を動かすための揺るぎない原動力となる」（第1話）と。

その後、炭治郎は修行と戦闘を繰り返す中で成長し、ある鬼との戦いの最中において「落ち着け 感情的になるな 集中しろ 呼吸を整え 最も精度が高い最後の型を繰り返せ」（第39話）と心の中で唱える。また別の機会には鬼への怒りの感情を「理不尽に命を奪い 反省もせず 悔やむこともない その横暴を俺は絶対に許さない」（第81話）と表現している。

さらに彼は、鬼の始祖であり最強の鬼でもある鬼舞辻無惨を前にして、「無惨 お前は 生存してはいけない生き物だ」（第181話）、「生き物に対してこれ程冷たい気持ちになったのは 腹の底まで厭悪が渦を巻いたのは初めてだ」（第182話）と言い放ち、戦いを挑む。

倒す対象は鬼という生き物ではあるが、アンディと同じく炭治郎もまた悪というものに対し、強い「義憤」の炎を燃やし続けていたと解釈される。

## (2) 衝動制御力 (Impulse Control)

『広辞苑 第七版』（新村編, 2018）によれば、衝動とは「反省や抑制なしに人を行動におもむかせる心の動き」である。ここから衝動制御力とは、無意識の本能に起因する発作的な行動を理性で制御する力であると解釈することができるであろう。

### ①『ショーシャンクの空に』

妻と間男が密会中に銃殺された日の夜、アンディは銃を携行して車を運転し、間男の家の前まで行っていた。彼は酒に酔っていたが、二人を脅かそうとしただけで実際には何もせず、銃の引き金も引いていないと証言している。それが真実だったことは物語の後半で明らかにされるが、このことは最愛の妻が不貞を働いている時でさえ、なお彼は自分の衝動を制御することができていたことを示している。脱獄前にレッドと交わした会話の中で、彼は自分がどれほど妻を愛し、妻との思い出を大切にしてきたかを明かすが、そんな妻の裏切り行為を目の当たりにしても、衝動的に蛮行に及ぶことはなかったのである。

その他、彼の衝動制御力の一端を示す事例を二点ほど紹介する。一つ目は、ボグズら囚人一派から性的暴行を加えられそうになった時のことである。アイスピックのような鋭利な物をちらつかせ恥辱的行為をするよう命じるボグズに対し、アンディはもしそれを自分の耳に突き刺したら、反射的に凄いで力こ噛みつくことになることと応じる。それに怯んだボグズが「なぜそれ

を？」と尋ねると、アンディは「本で読んだ お前も読んでみろ」と蔑むように答える。結果的にボグズは恥辱的行為の強要を諦め、アンディを痛めつけることができなかつた。このようにアンディは死に至るような恐怖に直面しても、咄嗟に安易な道を選ぶようなことはなかつたのである。

二つ目は、刑務所図書室で高卒同等資格試験を受けたトミーが自らの不出来に腹を立て、終了直後に答案用紙を丸めてゴミ箱に投げ入れた時のことである。アンディはタイムキーパーを務めていたが、実はそれまでの一年間、トミーに対し献身的に学問を教授していた。そんなアンディに対し、トミーは無礼な態度を取り、蹴散らすように出て行った。ところがアンディは顔色一つ変えず、黙ってしわくちやの答案用紙をゴミ箱から拾い上げたのである。すなわちアンディはトミーの激昂に刺激されることなく、あくまでも自分が為すべきことを淡々と為すのであった。そして後日、トミーは合格するのである。

## ②『鬼滅の刃』

先に述べた富岡は炭治郎が鬼へと化した禰豆子に襲われているところへ助けに入る。禰豆子の首を刎ねようとする富岡に対し、炭治郎は人間に戻す方法を見つけるので「やめてください どうか妹を殺さないでください」(第1話)と地面にひれ伏して懇願する。反射的にこのような無防備な行動をとった炭治郎に対し、富岡は「生殺与奪の権を他人に握らせるな!! 惨めったらしくうづくまるのはやめろ!! そんなことが通用するならお前の家族は殺されていない」(第1話)と一喝する。

当初の彼の衝動制御力はこの程度のものであったが、修羅場をくぐる中で次第に高められていく。

鬼殺隊の精鋭隊士の一人・悲鳴嶼行冥は「普段どれほど善良な人間であっても 土壇場で本性が出る」(第135話)と語り、また別の精鋭隊士・伊黒小芭内は「命の危機に瀕した時 生き物は爆発的な力を発揮する」(第189話)と言っている。炭治郎も無惨との最終の戦いの中で、激しい痛みを耐えながら、「集中しろ 今この瞬間の一秒以外考えるな(中略)一秒だ 一秒を繋げ 夜明けまでの一秒を繰り返せ」(第193話)と自分に言い聞かせている。そして激しさを増す死闘の真ただ中で、「どんな一撃でもいいから放て 無惨を削れ 頼む 動いてくれ 俺の体」(第198話)と、戦い全体の中に占める一秒一秒、一撃一撃の持つ意味を的確に把握し、自らを叱咤・激励するほどまでに成長する。

## (3) 原因分析力 (Causal Analysis)

原因分析力とは、現在を一つの結果と捉え、過去にどのような原因があったのかを分析する力であると解釈される。しかし、本稿ではさらに踏み込んで、「未来の望ましい状態を結果として想定した場合、今どのような原因を作るべきかを分析する力でもある」という解釈を加え、考察することとしたい。やや野心的な読みかもしれないが、この考え方は、13世紀の法華經の行者・日蓮が経典を引いて説いた「過去の因を知らんと欲せば其の現在の果を見よ未来の果を知らんと欲せば其の現在の因を見よ」(堀編, 1952)との文言と軌を一にするものである。

### ①『ショーシャンクの空に』

アンディは原因分析力に関する二つの素養を持っていたと考えられる。

まず彼が過去の出来事の原因を分析・反省し、修正していたことを示す事例として、1949年春に彼が発した短い言葉を紹介する。ある日、彼は刑務主任の相続税免除の手続きを代行することと引き換えに、仲間の囚人たちにビールをご馳走してもらうことに成功する。彼らは作業を中断し、屋上で気持ち良さそうにビールを飲むのだが、アンディは独り離れて座り仲間を優しく見つめる。一人の囚人がビールを持ってアンディにも勧めに行くのだが、彼は「酒はやめたんだ」と言って断る。おそらく彼はかつて自分が酩酊していたせいで事件の夜のことを正確に法廷で証言できなかったことを悔い、断酒していたのだと考えられる。

次に未来の結果を思い描き、そこから逆算して原因を収監中の「今」に作った事例を紹介する。ある晩アンディは独房の壁に刻まれた文字を見つけ、自分の名前を刻んでみたところ、壁の材質が意外と脆く柔らかいことを知る。地質学に精通する彼はトンネルを掘ることを思いつき、その穴を隠すため、ポスターの調達をレッドに依頼する。この時点で彼が脱獄を遠謀していたかどうかは定かではないが、まずは掘り進めてみようという意志があったことは間違いのないであろう。この小さなきっかけが将来の大きな結果をもたらす原因となるのだが、彼はその原因を人知れず大切に育てていったのである。

以上、彼は過去の原因を分析し軌道修正するとともに、未来に実現されるべき望ましい状態(結果)を想定し、今何をすべきか(原因)を特定していた。そしてその原因を着実に作り出していったのである。

## ②『鬼滅の刃』

成人であるアンディと異なり、炭治郎は子どもであり、前者ほどの教養や世間知を持ち合わせていない。山中で穏やかに暮らしていた素朴な少年が原因分析力を身につけていくのは、家族を惨殺された後、剣士としての修行と鬼との戦いを通じてである。炭治郎はどうかすれば鬼を倒せるかを懸命に考える。作品中には思考や分析などに関する言葉が何度も出てくるが、例として次のようなものが挙げられる。

「気合いだけではどうにもならない 頭だ!! 気合いと共に頭も使うんだ」(第25話)、「力に力で対抗するなら絶対に弱い方が負ける 力の流れを見誤らず正しく受け流せ」(第89話)、「考えろ 考えろ 自分にできる最大の事」(第90話)、「圧倒的な力量差があろうと 繰り返されるうちに慣れてくる 速度に順応し始める 一度失敗しても二度目があるならば対応できるようになる」(第94話)、「思い出せ 考えろ 何かあるはずだ」(第149話)、「考えろ 焦るな 絶対に思考を放棄するな」(第150話)、「絶対に諦めるな 考え続けることだ どんな壁もいつか打ち破る 弛まぬ努力で」(第151話)。

次から次へと登場する鬼にはそれぞれに強みと弱みがあり、炭治郎を含む鬼殺隊の隊士たちは必死になって個々の鬼の弱点、すなわちこちらが勝つために必要な要因や原因を見つけ出し、攻撃を加えるのである。

### (4) 楽観力 (Optimism)

Reivich & Shatté (2002) は「レジリエンスのある人たちは楽観的である。彼らは物事が良い方へと変わると信じている。彼らは未来へ希望を持っており、自分の人生の方向をコントロールできると信じている」と述べている。

「楽観力」と「自己効力感」は共に似ているが、微妙に異なる。前者は、物事全般や自分の力が及ばないことも好転すると信じて疑わない力であるといえよう。これに対して後者は、自分に関わる問題を自分の力でコントロールし、必ず良い方向へと変えていけるという信念であると捉えられよう。

## ①『ショーシャンクの空に』

冤罪という不条理な目に遭い、さらに暴力と腐敗、理不尽の巢食うショーシャンク刑務所に投獄されても、アンディは決して希望を捨てなかった。

刑務所図書館を拡充するため、州議会に陳情の手紙を書き続けられ、いつか先方は折れて支援してくれるはずだと彼は信じていた。またトンネルを掘り続けられ

つか必ず脱獄できるとの希望を抱いていた。そしてジワタネホというメキシコの太平洋岸の町に行き、そこでホテルを開業することを楽しみにしていた。また地元新聞社に刑務所長の不正を証明する帳簿等一式を送付すれば、警察が捜査に乗り出すと確信していた。さらにレッドが仮釈放されたら、彼に宛てた自分の手紙を読んで、必ずメキシコまで訪ねて来てくれると信じていたのである。

このように彼には明確な目標と強い意志に支えられた揺るぎない楽観力が備わっていたと考えてよいであろう。

## ②『鬼滅の刃』

炭治郎は素直で楽観的な少年である。炭を担いで山から町へと向かう途中で、彼は「生活は楽じゃないけど幸せだな でも人生には空模様があるからな 移ろって動いていく ずっと晴れ続けることはないし ずっと雪が降り続けることもない」(第1話)とつぶやいている。

また婚約者の命を奪われた一般人に対しては、「失っても失っても生きていくしかないです どんなに打ちのめされようと」(第13話)とそっと言葉をかける。そして自分の先祖が作った戦闘訓練用の絡線人形を鬼殺隊の精鋭隊士・時透無一郎に壊されてしまい、泣いている少年に対しては、「君には未来がある 十年後二十年後の自分のためにも 今頑張らないと 今できないこともいつかできるようになるから」(第103話)と言って励ます。

さらに自分と同期の隊士・我妻善逸に対しては、前回の鬼との戦いを振り返り、「こんなふうにと人と人の繋がりが窮地を救ってくれることもあるから 柱稽古で学んだことは全部きっと 良い未来に繋がっていくと思うよ」(第130話)と語る。また自分の技量の低さに自信を失っている仲間の隊士・不死川玄弥に対しては、「一番弱い人が一番可能性を持ってんだよ (中略) 敵は強い人を警戒していて壁が分厚いけど 弱いと思われている人間であれば警戒の壁が薄いんだよ だからその弱い人が予想外の動きで壁を打ち破れたら 一気に風向きが変わる 勝利への活路が開く」(第172話)と激励している。

このように炭治郎もまた常に物事をポジティブな方向へと考える思考的習性があったものと捉えられる。

### (5) 自己効力感 (Self-efficacy)

先に述べたとおり、自己効力感とは、自分に関わる問題を自分の力でコントロールし、必ず良い方向へと変え



ていけるという信念であると考えられる。

#### ①『ショーシャンクの空に』

明示的に描かれてはいないが、アンディはトンネルを掘り進めるに従って、脱獄後にどのように逃走し、どの地に落ち着き、そこで何をして生計を立てるかについても考えを巡らせていたと考えられる。その過程において、彼は刑務所長の汚職が万一発覚しても、所長が捕まらないようランドール・スティーブンスという架空の人物を書類上に作り出し、この人物の名義で殖財をしていく。

1965年にトミーらの新入りを乗せた囚人護送車が刑務所に到着した時、アンディはレッドと中庭の片隅でチェッカーをしていた。この時アンディは、所長に巧みに利用されている自分を「私は結局 奴の奴隷さ」と言って自嘲する。しかし、上述のスティーブンス氏の書類や証券のサインは所長ではなくすべてアンディがしていた。つまり、彼の身は所長に支配・管理されていたものの、その資産は彼が完全に掌握・管理していたのである。実際のところ、彼の署名なしにはスティーブンス氏の資産は一銭たりとも動かすことはできなかった。

税務・会計経理・資産運用は彼の突出した専門分野であり、獄中の身でありながら、他者の追従や介入を許さず、まさに彼の独壇場であった。それに加え、彼は所長の弱みを握り、かつ資産も自分の意のままに操れていたことから、必ずや脱獄も成し遂げられるという確信があったものと考えられる。

彼の唯一の不安は、はたして誰にも気づかれずに脱獄を成し遂げられるだろうかという点だったのかもしれない。長年その不安に苛まれ、独り格闘しながらも、彼は持ち前の自己効力感でもってそれをねじ伏せていたものと考えられる。

#### ②『鬼滅の刃』

ごく普通の少年だった炭治郎は特段自己効力感を備えているわけではなかった。しかし彼の場合、自分自身を叱咤激励しながら鬼と戦い、勝つことによって自信を深め、徐々に自己効力感を高めていったと考えられる。

初めて鬼に勝った時、彼は「斬れた 鬼に勝った 強くなってる 鍛錬は無駄じゃなかった ちゃんと身についた」(第6話)と感懐する。

その後の鬼との戦いの中でも、「どんな鬼とも戦う!! 戦って勝つ!!」(第17話)、「真っすぐに前を向け!! 己を鼓舞しろ!! 頑張れ 炭治郎頑張れ!! 俺は今までよくやってきた!! 俺はできる奴だ!! (中略) 俺が挫ける

ことは絶対に無い!!」(第24話)、「俺はやれる!! 絶対やれる!! 成し遂げる男だ!!」(第25話)、「燃やせ!! 心を燃やせ!!」(第77話)、「勝つ 必ず勝つ 俺たちは」(第93話)と、己に鞭を打ち続ける。そして初めて無惨と本格的に相對した時、彼は「地獄に行くのはお前だ無惨 絶対に逃さない 必ず倒す」(第139話)と叫ぶのである。

このように炭治郎は、自分の思いを内に秘めるタイプのアンディとは対照的であり、あえて声に出して自分を励ますことによって技を磨き、自己効力感を高めていったと考えられる。

#### (6) 共感力 (Empathy)

共感力とは、他者の心理的・感情的状態を表す手がかりを読み取る力であり、また顔の表情や声の調子、身振りなどの非言語情報から人々が何を考え、感じているかを察知する能力である (Reivich & Shatté, 2002)。

#### ①『ショーシャンクの空に』

収監された日の翌朝、食堂でアンディは自分と共に入所した囚人の一人が前夜に看守に殴打され、死亡したことを知る。彼は近くでそのことを話していた囚人たちにその囚人の名前を尋ねるが、死んだ奴のことを聞いてどうするんだ、と一喝される。彼がなぜ名前を知りたいと思ったのかは不明だが、少なくとも「同期入所」の囚人に何らかの同情や憐れみを覚えたのであろう。入所二日目で自分自身がまだ動揺の渦中にあっただであろうが、彼は他者に対しても幾許かの関心を寄せたのである。

アンディは囚人だけでなく刑務官にも共感し、彼らを手助けする行動をとるが、その事例に関しては次項の「働きかける力」の中で取り上げることとし、ここでは彼がレッドに対して示した共感力を三点ほど紹介する。

一つ目は、1949年春に彼が刑務主任に対し囚人仲間 にビールをご馳走させることに成功した直後に映し出された場面でのやりとりである。中庭でのチェッカーの対局後、アンディとレッドは互いに投獄理由を尋ねる。アンディは自分は無実だと言い、続いてレッドに訊く。これに対しレッドは殺人だと正直に告白する。すでにレッドの人となりを知っていたアンディはじっと相手を見つめながら無言で小さく数度頷く。このアンディの動作は、レッドには消せない過去があるものの、自分はレッドという人間を受け止め、友として受け入れるという意思を示したシグナルであったと捉えられる。

二つ目は、レッドの入所30年目の面接で仮釈放が却下された時に、アンディから彼へ「残念賞」としてハ



ーモニカをプレゼントしたことである。アンディは落胆している友の心中を察するとともに、驚かせたかったので別の調達屋に依頼したことを悪く思わないでほしいと言う。

三つ目は、アンディの脱獄後に罪を暴かれ、刑務主任が逮捕され、刑務所長が自害するに至った後、レッドに絵葉書が届いたことである。それはアンディからのものであったが、レッドに追及の手が及ばぬよう宛名だけが書かれてあった。レッドはその消印を見て、アンディがフォートハンコックというテキサス州の町から国境を越えたことを知る。レッドは図書室で地図帳を開き、その位置を確認するとともに、悠然と車を運転し南下するアンディの姿を想像して笑みをこぼす。アンディは刑務所に残されたレッドの寂寥感を思いやり、少しでも彼に喜んで欲しかったとともに、自分の辿ったルートを知らせたかったのだらうと考えられる。

## ②『鬼滅の刃』

斎藤 (2021) は、『鬼滅の刃』の登場人物は皆「被害者」であり、本作品は「心的外傷を抱えた者同士が殺し合う物語」であるとの見解を示している。

鬼に家族を惨殺され、妹を鬼にされた炭治郎も被害者の一人である。ただし、彼には生来の優しさがあり、師匠の鱗滝左近次に言わせれば「思いやりが強すぎて決断できない」「鬼にすら同情心を持っている」(第3話)ほどであった。物語の序盤で鬼に勝った時、炭治郎は消えていく鬼の手を握り締めながら「神様どうかこの人が今度生まれてくる時は 鬼になんてなりませんように」(第8話)と祈る。また別の機会には、自分は容赦なく鬼に刃を振るうと誓う一方で、「鬼であることに苦しみ 自らの行いを悔いている者を踏みつけにはしない」「鬼は人間だったんだから 俺と同じ人間だったんだから (中略) 醜い化け物なんかじゃない 鬼は虚しい生き物だ 悲しい生き物だ」(第43話)と、死んだ鬼の遺物にまでは不敬な行為をしないよう富岡に訴えている。

また炭治郎は仲間に対しても共感力を発揮する。鬼との戦闘後、体力回復を必要としていた彼は、休息期間中に自分の面倒を見てくれた後方支援部隊の神崎アオイに対し、「俺を手助けしてくれたアオイさんはもう俺の一部だから アオイさんの想いは俺が戦いの場に持って行くし」(第53話)と話しかける。このまさかの言葉に驚いたアオイはうれしさのあまり洗濯物を取り込むのも忘れ、去って行く炭治郎をいつまでも見ているのであった。

炭治郎はより強い鬼と対峙していくにしたがって、仲間と協力して戦うようになる。命を落とす隊士も出てくる中、「俺は応えなければ 俺に力を貸してくれるみんなの願いは 想いは 一つだけだ 鬼を倒すこと 人の命を守ること 俺はそれに応えなければ!!!」(第113話)と強く自身に誓う。

斎藤 (2021) は、炭治郎のことを「空っぽ」の人間であり、「およそ想像力というものが欠如していて、他人と共感する力もない」と断じている。もしかしたら最初の頃の炭治郎にはそのような面もあったのかもしれないが、上掲の度重なる言動から、むしろ彼には人並外れた共感力が備わっていたと考えるほうが妥当であろう。

## (7) 働きかける力 (Reaching Out)

Reivich & Shatté (2002) は、働きかける力が高い人は自ら他者に接触し、新しい経験をすることに喜びを見出す傾向があると述べている。また井島 (2021) はこの力を「他者に関わり、他者を巻き込み、他者の行動を促進させる能力である」と定義している。

### ①『ショーシャンクの空に』

アンディは冷静な人物ではあるが、決して受け身ではない。むしろ自分から話しかけたり、自発的に行動する場面が随所にみられる。

のちに無二の親友となるレッドとの関係においても、最初に相手に話しかけたのはアンディのほうであった。また1949年春に彼は勇敢にも自ら刑務主任に近づき、相続税免除の手続きを買って出る。この働きかける力が、追って刑務主任を動かす、アンディに暴行を働いてきたボグズとその一派を自分から遠ざけることにつながるのである。

やがてアンディの有能さを聞きつけた刑務所長は彼を洗濯係から図書室係に配置転換するとともに、自らの不正経理をも担当させる。彼はまた自分の子どもの教育費を作りたいと申し出てきた一人の刑務官の相談にも乗るほか、他の刑務所の刑務官たちの確定申告まで代行する。

彼はその保護された特別な立場を利用し、囚人たちに対しても次々と利他的な行動をとる。まず州議会に働きかけて刑務所の拡充予算を提出させることに成功する。次に整備された図書室を使って高卒同等資格の取得を望む者を支援する。また州議会から寄贈された中古レコードの中から「フィガロの結婚」を見つけ出し、その美しい音楽を自分が鑑賞するだけでなく、刑務所中に大音量で放送し、全囚人に聴かせる。

加えて彼は、仮釈放の日が近づき、半世紀ぶりに刑務所外に出ることを恐れた老囚人が突如取り乱し、仲間の一人の首筋にナイフを突き付けた時、その老囚人に近寄って説得し、事態を収拾する。

その他、脱獄決行前のある日に彼はレッドと中庭で会話をする。彼はレッドが仮釈放されたら、バクストンという郊外の町へ行き、大きな檜の木の脇の石垣の根元にある黒曜石の下を掘るよう約束させる。物語の最終局面でレッドはその約束を果たすのだが、そこにはアンディからレッドに宛てた手紙とメキシコへの旅費となる現金が入った箱が埋められていたのである。その手紙を読み終え、秋の虫が飛び交う草地を歩きながらレッドはどれほどの喜びを噛み締めていたであろうか。

先の中庭での会話の中で、アンディは人生は「必死に生きるか 必死に死ぬか」のどちらかしかないと言われ、決然と立ち上がる。この言葉はレッドの胸にも深く刻まれ、仮釈放違反をしてメキシコに向かうべく定宿を去る時にレッド自身も復唱する。彼は続けて「俺は生きるぞ」と力強く己に誓うのである。まさにアンディの働きかける力が、レッドに生きる希望を与え、具体的な行動へと駆り立てたのだと考えられる。

## ②『鬼滅の刃』

炭治郎に働きかける力があることは全編を通じて描かれている。

炭治郎は鬼と化した禰豆子を殺そうとする富岡を踏みとどまらせただけでなく、彼の心を動かす。考えを改めた富岡は炭治郎に対し、鱗滝を訪ね、自分の紹介で来たと言うよう伝える。富岡は同時に手を回し、炭治郎を剣士として育ててほしい旨の手紙を鱗滝に送る。こうして炭治郎の修行が始まるのだが、後に鱗滝は「炭治郎思えばお前が鬼になった妹を連れて来た時から 何か大きな歯車が回り始めたような気がする」(第147話)と語り、この兄妹がそれまで停滞していた状況を一気に変えていったことを回想している。

また序盤の那田蜘蛛山での鬼との戦いの中で、炭治郎は同期の隊士・嘴平伊之助に対し、「一緒に戦おう 一緒に考えよう この鬼を倒すために力を合わせよう」(第31話)と呼びかける。その言葉を受け止めた伊之助は「こいつは自分が前に出るのではなくて 戦いの全体の流れを見ているんだ」(第31話)と、炭治郎に嫉妬しながらもその冷静さと視野の広さに感服する。

その後も炭治郎は、「自分にできなくても 必ず他の誰かが引き継いでくれる 次に繋ぐための努力をしなきゃならない」(第103話)、「人のためにすることは 結局

巡り巡って自分のためにもなっているものだし」(第106話)、「一人でできることなんてほんのこれっぽっちだから人は力を合わせて頑張るんだ」(第117話)、「みんなで勝とう!! 誰も死なない 俺たちは…」(第123話)と、仲間と自分を鼓舞し続けている。

その他、弱者を忌み嫌う鬼に対しては、その考え方の誤りを指摘し、次いで「強い者は弱い者を助け守る そして弱い者は強くなり また自分より弱い者を助け守るこれが自然の摂理だ」(第148話)とたたみかけている。

最後の無惨との死闘にあっては、炭治郎は顔面を潰されながらも「みんなで繋いだ一秒が無惨をここまで追いつめた みんな みんな…!! 絶対倒すから 俺 最期までちゃんとやるから」(第195話)と誓う。そしてついに無惨をこの世から葬り去る。

本作品の最後は次のように結ばれている。「たくさんの強い想いが大きな大きな刃となり 敵を討った みんなの力です 誰一人欠けても勝てなかった 生きていることはそれだけで奇跡(中略) 精一杯生きてください 最愛の仲間たちよ」(第205話)と。この言葉の発話者は不明であるが、それはおそらく炭治郎を含むすべての登場人物の想いであり、また作者自身の彼らに対する慈しみと感謝の気持ちなのであろう。

## 7. 結論

『ショーシャンクの空に』と『鬼滅の刃』は、前者は映画、後者は漫画と表現媒体が異なるほか、設定された舞台や時代背景も大きく異なる。しかし両作品には第5節で挙げたような共通点も少なからず存在する。いわば両作品の主人公は時空を超えた同類といえるのである。

本稿ではその共通点の中でも特にレジリエンス(再起力)に着目し、その7つの構成要素である「感情調整力」「衝動制御力」「原因分析力」「楽観力」「自己効力感」「共感力」「働きかける力」の順に沿って、それぞれの主人公の言動をつぶさに分析した。その結果、彼らとその能力をすべて保有し、伸ばし、いかんなく発揮していることが確認された。

思えば、アンディも炭治郎もいわば「市井の人」であり「普通の人」である。彼らはもともとある程度のレジリエンスは持っていたが、それを劇的に伸ばし、存分に発揮させたものは、ある日突然彼らの身に降りかかった不運であり逆境であり苦難であった。彼らはあたかも激しい濁流の中にあって、飲み込まれないよう自身の執念と目的意識を杭(くい)として必死になって抗い、戦い続けたのだと理解される。その過程において、とかく折

れそうになる心を支えてくれたのは仲間であり親友の存在であった。

まさに彼らの生き方には、自らも亡命経験のあるオーストリアのユダヤ系作家ツヴァイク（山下訳、1970）の「奈落の底を知る者だけが生のすべてを認識するのであるから。つきはなされてみて初めて、人にはその全突進力があたえられるのだ」という言葉を彷彿とさせるものがある。

振り返ってみれば、私たちの普段の生活もうまく行かないことや行き詰まりの連続であると思われる。その「日常」をあえて「逆境」と捉えるならば、私たちがアンディ、そして炭治郎と同じく、生来持っているレジリエンスをさらに発揮し、自分の人生というドラマの主人公として自己実現を成し遂げるとともに、多様な価値を社会に対して創造し提供できるのではないだろうか。この二つの作品が我々に発しているのはそのようなメッセージであると考えられる。

映画『ショーシャンクの空に』が長年にわたって揺るがぬ国際的高評価を維持し、漫画『鬼滅の刃』が短期間で記録破りの売上を記録した理由は、二人の主人公が我々に内在するレジリエンスを伸ばし発揮する方法を身をもって示してくれたからであり、その姿に我々の心と魂の奥底が共鳴したからにほかならないと思料される。

## 参考文献

Coutu, D. L. (2002). How Resilience Works, *Harvard Business Review*, May 2002.  
<<https://hbr.org/2002/05/how-resilience-works>> (2021年10月31日閲覧)

Darabont, F. (1996). *The Shawshank Redemption: The Shooting Script*. New York: Newmarket Press.

Dawidziak, M. (2019). *The Shawshank Redemption Revealed: How One Story Keeps Hope Alive*. Guilford: Lyons Press.

フランクル, E. ヴィクトール (霜山徳爾訳) (1957) 『死と愛：実存分析入門』, みすず書房.

吾峠呼世晴 (2020) 『鬼滅の刃』 (全23巻), 集英社.

Grady, M. & Magistrale, T. (2016). *The Shawshank Experience: Tracking the History of the World's Favorite Movie*. New York: Palgrave Macmillan.

ハーバード・ビジネス・レビュー編集部編 (DIAMOND ハーバード・ビジネス・レビュー編集部訳) (2019) 『レジリエンス』, ダイヤモンド社.

服部弘一郎 (2019) 『銀幕の中のキリスト教』, キリスト教新聞社.

堀日亨編 (1952) 『日蓮大聖人御書全集』, 創価学会.

井島由佳 (2021) 「『鬼滅の刃』が教えてくれた折れない心のあり方」, 『心と社会』, 52(2), 102-107.

Internet Movie Database (IMDb). *Top Rated Movies*, <[https://www.imdb.com/chart/top?ref\\_=nm\\_mv\\_250](https://www.imdb.com/chart/top?ref_=nm_mv_250)> (2021年10月31日閲覧)

株式会社 TORICO 「歴代発行部数ランキング」, 『漫画全巻ドットコム』  
<<https://www.mangazanken.com/ranking/books-circulation.html>> (2021年10月31日閲覧)

鎌谷崇史, 中尾聡史, 樋野誠一, 毛利雄一, 片山慎太郎, 東徹, 川畑祐一郎, 藤井聡 (2019) 「大震災に対する各地域の道路ネットワークレジリエンス評価」, 『土木学会論文集 D3 (土木計画学)』, 75(5), I\_353-I\_363.

姜尚中 (2007) 「姜尚中 映画を語る (第21回)」, 『第三文明』, 第三文明社.

金澤誠 (2017) 「ショーシャンクの空に」, 前野裕一編, 『午前十時の映画祭8 プログラム』, キネマ旬報社.

Katz, L. Robert. (1974). Skills of an Effective Administrator, *Harvard Business Review*, 52(5), 90-102.

Kermode, M. (2003). *The Shawshank Redemption*. London: British Film Institute.

北村正晴 (2014) 「レジリエンスエンジニアリングが目指す安全 Safety-II とその実現法」, 『電子情報通信学会 基礎・協会ソサイエティ Fundamentals Review』, 8(2), 84-95.

久米博 (2005) 「解釈学」, 下中直人編, 『世界大百科事典』改訂版, 第4巻, 平凡社.

國友万裕 (2015) 「同性愛映画としての『ショーシャンクの空に』」, 『映画英語教育研究』, 20, 137-147.

黒川裕一 (2005) 『見ずには死ねない！名映画300選 (外国編)』, 中経出版.

Magistrale, T. (2003). *Hollywood's Stephen King*. New York: Palgrave Macmillan.

Masten, A. S., Best, K. M., & Garmezy, N. (1990). Resilience and development: Contributions from the study of children who overcome adversity, *Development and Psychopathology*, 2(4), 425-444.

Nathan, I. (2019). *Stephen King at the Movies: A Complete History of the Film and Television*

- Adaptations from the Master of the Horror*.  
London: Palazzo Editions.
- 西内誠 (2009) 「"Get busy living or get busy dying":  
*The Shawshank Redemption* (1994)」,  
『OLIVA』, 16, 97-155.
- 野口寿一 (2019) 「パーソナリティ、発達障害傾向および回復力 (レジリエンス) とストレス反応との関連: 労働態度尺度 ScWAT を用いて」, 『島根大学人間科学部紀要』, 2, 11-17.
- オリコン株式会社『ORICON NEWS』(2021-05-31)  
<<https://www.oricon.co.jp/news/2195024/>>  
(2021年10月31日閲覧)
- Parse, R. P. (2007). Hope in "Rita Hayworth and Shawshank Redemption": A Human Becoming Hermeneutic Study, *Nursing Science Quarterly*, 20(2), 148-154.
- Psychology Today. *Resilience*,  
<<https://www.psychologytoday.com/us/basics/resilience>> (2021年10月31日閲覧)
- Reinhartz, A. (2013). *Bible and Cinema: An Introduction*. Abingdon: Routledge.
- Reivich, K. & Shatté, A. (2002). *The Resilience Factor: 7 Keys to Finding Your Inner Strength and Overcoming Life's Hurdles*. New York: Three Rivers Press.
- 齋藤孝 (2003) 『段取り力: 「うまくいく人」はここがちがう』, 筑摩書房.
- 斎藤環, 佐藤優 (2021) 「対談 コロナとメンタル (下) 『鬼滅の刃』大ヒットと、高まる「依存症」危機の裏側」, 『中央公論』, 135(6), 158-165.
- Sánchez-Escalonilla, A. (2005). The Hero as a Visitor in Hell: The Descent into Death in Film Structure, *Journal of Popular Film and Television*, 32(4), 149-156.
- 澤野純一 (2020) 「ある映画における宗教の多元性について: 『ショーシャンクの空に』に埋め込まれたキリスト教」, 『福祉と人間科学』, 30, 73-83.
- 新村出編 (2018) 『広辞苑 第七版』, 岩波書店.
- 高橋悟 (2019) 「映画『ショーシャンクの空に』の主人公の魅力を解き明かす: Katzが唱えた3つの基本スキルの視点から」, 『英語と文化: 大阪樟蔭女子大学樟蔭英語学会誌』, 9, 15-24.
- 高橋悟 (2020) 「映画『ショーシャンクの空に』の主人公が実現したものとは何か: フランクルが唱えた3つの価値の視点から」, 『大阪樟蔭女子大学研究紀要』, 10, 13-22.
- 高橋悟 (2021) 「キャリア・チェンジ・ストーリーとしての映画『ショーシャンクの空に』」, 『大阪樟蔭女子大学研究紀要』, 11, 1-12.
- 戸松泉 (2012) 「エクリチュールの解釈学: 森鷗外『舞姫』の改稿をめぐる」, 松澤和宏編, 『テキストの解釈学』, 水声社.
- 鷲巣義明 (1995) 「スティーヴン・キング映画の系譜」, 『キネマ旬報』, 1162, 26-29.
- 渡辺祥子 (1995) 「ティム・ロビンズってほんとにいい役者」, 『キネマ旬報』, 1162, 24-25.
- ツヴァイク, シュテファン (山下肇訳) (1970) 『ジョゼフ・フーシェ: ある政治的人間の肖像』, 潮出版社.
- 映画作品  
『ショーシャンクの空に』 (*The Shawshank Redemption*).  
Dir. Frank Darabont. Castle Rock Entertainment,  
1994. Shochiku Home Video, 2007. DVD.
- (本稿の中で引用したセリフは、特に記載のない限り、本DVDの日本語字幕を採用した)



# **Delving into the Resilience Factors of the Protagonist of *The Shawshank Redemption*: A Comparative Analysis with Those of the Counterpart of *Demon Slayer [Kimetsu no Yaiba]***

Faculty of Liberal Arts, Department of English as an International Language  
Satoru TAKAHASHI

## **Abstract**

Research in psychology shows that “resilience” consists of seven factors or abilities, that is, emotion regulation, impulse control, causal analysis, optimism, self-efficacy, empathy, and reaching out. The objective of this article is to clarify how and to what extent the protagonist of *The Shawshank Redemption* possesses and wields resilience. To make this inquiry more profound and extensive, the author examines his language and behavior in comparison with those of the counterpart of the Japan-made manga, *Demon Slayer [Kimetsu no Yaiba]*. This is because they have some traits and milieux in common while being situated in different settings. Then, it is revealed that both of them innately own, further solidify, and fully exercise all the factors of resilience amidst the adversity in which they are forcibly placed. Through their attitude and behavior depicted in their stories, they appear to be delivering us a message that we, as commonplace people, can also overcome difficulties with enhanced resilience as we face them one after another in our daily lives.

Keywords: resilience, *The Shawshank Redemption*, *Demon Slayer [Kimetsu no Yaiba]*